

精神文化学会 第13回 学術大会

日時:令和5(2023)年9月18日(月)

会場:大阪市中心公会堂小集会室

大会テーマ「戦争論」

開場

9:30

第14回総会(会員限定)

9:40-10:00 司会 幹事 海老名宜陽

一般受付・入場

10:00

開会挨拶

10:10-10:15 理事 岡田晋亮

午前の部

研究発表

司会 幹事 仙波義規

10:15-10:45 森 一郎

「日本国憲法で我が国を守ることができるのか」

要旨:現在の日本国憲法のもとで、我が国を守ることができるのかと問われれば、おそらく大半の人は否と答えるであろう。そして、だから改憲が必要だ、と。しかしながら、現在の岸田政権は口先では改憲が重要課題だと言っているが、実際にはその動きはほとんどない、と言っても過言ではない。では、もし日本に有事が起こった場合どうなるか。すぐに改憲ができないならば、結局、現在の憲法を解釈し直すことによってしか、日本を守ることができないのではないか。それでは、どのように憲法の条文を解釈し直したら日本を守ることができるのか。本発表では、それを明らかにしていきたい。

10:45-11:15 溝浦健児

「日本有事と戦争の本質」

要旨:ロシアによるウクライナ侵攻によって、世界は激変した。第二次世界大戦以来となる、欧州における大規模戦争であるという衝撃のみならず、第三次世界大戦と全面核戦争の恐怖が、人類を襲った。それは同時に、国連安保理常任理事国、すなわち核兵器保有五大国による、理不尽な権力構造が健在であるという、国際社会の生々しい現実を、白日の下にさらすこととなった。自由民主主義の旗手として、世界の警察を標榜してきたアメリカ合衆国ですら、核保有国による蛮行を武力制裁できないのだ。大多数の日本人にその自覚はないであろうが、ロシア・ウクライナ戦争は、対岸の火事ではない。ロシア連邦、中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国という、権威主義かつ核保有の軍国主義国家に、周囲を囲まれている我が国は、世界屈指の地政学的リスクを抱えている。外交は軍事的裏付けなしには成立しないと悟らなければ、日本人に未来はない。

11:15-11:45 能村晋平

「日本人と戦—失われた戦う心—」

要旨:我が国では夏が近づいてくると、メディアで 80 年前の戦争に関する特集が組まれる。そこでは、あの戦争の残酷さや愚かさ、戦時下の生活の苦しさや理不尽さ、さらには当時の日本軍の蛮行が生々しく語られる。そして、大日本帝国は世界の秩序を乱した悪者であったという反省と、戦後の民主主義と戦争放棄をうたう平和憲法が 80 年、我が国を戦争から守ってきたという結論が導き出される。我が国は戦争を「悪」として捉えることはできるが、そのあまりに戦争から眼をそむけているのではないか。現代においても、一方的な侵略が起こり得ることはウクライナの例からも明白であるが、我が国では祖国を守るために戦おうとする人は少数派である。自衛のため、祖国を守るための戦争をも否定し、ともかく個人が、祖国を離れてでも生き延びることを重視するのは、正しいのだろうか。本論では我が国が歴史的、伝統的に戦争をどうとらえてきたのかを考えてみたい。

午後の部

講演

司会 専務理事 徳田季晋

13:00-13:30 特別講演 理事 永松道晴

「ビジネスは武器を使わない戦争 私の歩んできた戦場から日本の将来を望む」

要旨:私は学卒後 30 年総合商社の社員、後半 30 年は自営で貿易業務に携わって来た。ビジネスは武器を使わない戦争だ。商品売り込みで市場を占有する営業が中心の商社の役割も 1990 年代から変化し、現在は新たなビジネスモデルとサプライチェーンの構築など経営トップが決める

プロジェクトが中心となっていて、若手世代が現場でイニシャチブを発揮する機会が限られている。しかし現実には逆に 1945 年以降の秩序が壊れてすべて変革する時期に来ており、それは戦争で破壊された社会やインフラの再建ではなく、デジタル化を伴った新しい経済的プラットフォームの構築で 20~30 代の若手世代が手掛けるべき仕事だ。手元に配布したペーパーは、私の歩んだ道程に国際情勢と日本国内での出来事を並列したもので、その時々々の社会情勢に直面して悪戦苦闘して来た記録だ。その経験から将来の日本がビジネスで国際社会に貢献し世界をリードできる戦場は R&D を伴った「物づくり」にあり、この視点から将来を展望することを強く勧める。

13:30-14:30 基調講演 会長 近藤 剛

「文化戦争の時代」

要旨: 文化的価値観をめぐるイデオロギーの対立が世界に分断をもたらしている。特にアメリカでは 1970 年代以降、公民権運動やフェミニズムを通したりベラルと、伝統的価値観の喪失を危惧するコンサバティブとの間で摩擦が生じ、80 年代には妊娠中絶、同性愛、アフーマティブ・アクション等をめぐって国民世論は真っ二つに引き裂かれ、大統領選挙にも直接の影響を与えるほど深刻な問題となっている。この状況を「文化戦争」と見なして警鐘を鳴らしたのが、社会学者ジェームズ・ハンターであった (*Culture Wars: The Struggle To Define America*, 1991)。本講演では、アメリカの文化戦争を典型的な事例研究の対象としつつ、1960 年代のニューレフト運動、さらにはフランクフルト学派の言説にまでさかのぼり、イデオロギーの対立の起源を思想的に明らかにするとともに、価値観の両極端化が放置されたまま、既存の文化の在り方を蝕んでいくことがないような方策を模索したい。

14:30-14:50 intermission

研究発表

司会 幹事 上野 洋

14:50-15:20 與賀田光嗣

「正戦論再考 Daniel M. Jr. Bell (2009), Just War as Christian Discipleship を手がかりに」

要旨: キリスト教は戦争をどう捉えるのか。そこには三つの類型、①絶対平和主義、②聖戦論 (holy war)、③正戦論 (just war) を見ることができる。絶対平和主義はいかなる暴力の行使をも許さない。聖戦論は宗教的イデオロギーによって起こされる戦争論 (→ 宗教戦争) である。正戦論は、正義や平和の回復のための暴力行使を、倫理的規定の下に容認する立場である。キリスト教の歴史の大多数を占めるのは正戦論である。近代における正戦論は啓蒙主義の発達とともに、キリスト教的価値観を捨象し、国際法としての発展を遂げた。しかしながら冷戦崩壊後、人道的介入という「正しさ」の戦争、テロとの戦いに見られる非対称戦争など、新たな正戦論の構築が模索されている。本

稿では Daniel M. Jr. Bell (2009), *Just War as Christian Discipleship* を手がかりにキリスト教正戦論を再考したい。

15:20-15:50 豊田真史

「合法的戦争の概念から考える戦争論」

要旨:戦争の問題は、絶えず人間の前に存在している。戦争は、いくら根絶を願おうと歴史の只中に存在する。キリスト教会もまた歴史の中に存在しており、戦争について不断に思考してきた。アウグスティヌス、トマス・アクィナスによって展開されてきた、「合法的戦争」の概念はジャン・カルヴァンを経て、17世紀のプロテスタントの諸信条にも流れ込んでいる。絶対的平和主義=キリスト教との見解が日本では定着しているが、歴史的にはそのような図式は成立しない。今日の状況を考える際に、絶対的平和主義の思想は確かに、一定の意味を持っていることは認めるが、それが悪を助長させることにもつながるのではないか。今日的にどのように考えていけばよいか思索する。

15:50-16:20 海老名宜陽

「『平家物語』に見られる合戦のルールについて」

要旨:平家物語に描かれる名乗りを代表するような、合戦におけるルールと呼べるような文化について考える。はじめに、石井紫郎の論を引用しながら、平家物語に見られる合戦のルールを整理する。次に、そのようなルールが成立した経緯について、石井の説を引き続き引用しながら考察する。また石井説への反対意見について紹介し、それを批判的に捉え、発表者の考えを述べることができればと思う。

閉会挨拶

16:20-16:25 理事 能村晋平

記念撮影

懇親会

18:00-20:00 香港海鮮飲茶樓

☆注意事項☆

・昼食について

…中央公会堂館内にレストランがございます。また小集会室での飲食は可能です。

・エレベーターの利用について

…小集会室への移動は、【地下1階西入口】→【エレベーター4】→【3階】が便利です。

地下1階

B1F

- 大会議室
- 第1会議室
- 第2会議室
- 第3会議室
- 第4会議室
- 展示室
- 事務室(受付)
- レストラン
- サンクンガーデン



3階

3F

- 中集会室
- 小集会室
- 第9会議室
- 特別室

